

書評

ガブリエル・クビー著『グローバル性革命 —自由の名によって自由を破壊する—』

楊 尚眞 (弘前学院大学教授)

現代社会は自由の限界を知らずに暴走している。かつてタブー視されたことを当然の権利だと主張し、それが真の自由であり、寛容であり、洗練されていると思われている。男女の愛を越えて同性愛は正常であり、性の多様性であり、個性であるとして同性婚を合法化すべきという主張まで出ている。それだけではない。様々なメディアを通じて性的なイメージとポルノが無分別に配布され、子供たちが正しい性倫理・道徳を確立する前に低俗な性文化にさらされ、幼年期における純粋で健やかな精神が脅かされている。果たしてこの社会的な変化が望ましい現象であるのか。このような変化によって、人類はより良い世界へ向かっているのだろうか。

ドイツの社会学者ガブリエル・クビーは、今日、私たちが直面している巨大な性文化のイデオロギーが突発的な偶然でも、一時的な流行でもなく、性に対する認識を根本的に変え、人類と社会に根本的な変化を起こそうとしている性革命への世界的な戦略であることを示している。性革命による社会の変化を肌で感じた著者は、膨大な資料と具体的な事例に基づいて、文化革命を主導するジェンダーイデオロギーの起源とそれに起因する多くの悪影響について、詳しく説明している。また、国際的に共有されている言語的・知的・学術的手段と言論、法律、政策的ツールを使って、性革命を主導する目に見えない手段があることを知らせる。

本書を読めば、現代社会で起きている性をめぐる変化を見る、新しい視点を持つことになる。また、このような変化がどれほど人類にとって危険なことであり、だれでも、性革命に対して寛大に捉えてしまうという、致命的な悲劇を引き起こす可能性があることに気付く。

本書は、次のようなものを含みながらグローバル性革命について扱う。

それは、すべての文化と宗教を通して継承された価値体系の破壊、フランス革命からジュディス・バトラーに至るポストモダンのジェンダーイデオロギーの知的な先導者、国際的な政治エリートたちによって行われる、この革命的アジェンダへの支援、ジョグジャカルタの原則に従うプログラムに現れる全体主義的な取り組み、政治的意図を持って言語を変えるまでのジェンダーイデオロギーの堅固な位置づけ、子供から青少年に至るまでに保護されないポルノの病的拡散、グローバル性革命を牽引した活動家の主な動力としての同性愛擁護運動について、詳細に語っている。

現在の日本社会における性文化の急激な変化を目撃して、驚くことが多い。西欧で数百年間、紆余曲折を経て進行した性革命が、そのまま圧縮されて浸透している。しかし、日本社会はそのグローバル性革命によって影響を受けていることに気づいているのだら

うか。私たちの社会で起こっている性革命的な様相が西欧でどのように起こり、性道徳、家庭、結婚にどのような破壊的影響を及ぼしているかを具体的に語る本書の内容を把握することによって、日本社会の変化を読み取る能力が備えられることを希望する。日本は、欧米の暗く無残な状況から学び、日本の未来を新たに設計することができなければならない。そして、明るく健やかな日本の未来をつくるためには、各領域においてこの性革命に対抗する行動がなければならない。人間の尊厳性を守り、生命と結婚と家族、さらに社会の生存のための闘争が必要であることを、本書は明らかに示している。

著者は、一貫して人間は自由意志を与えられた存在であるがゆえに道徳が必要で、道徳は善と悪を分別し、私たちの自由をどのように使うかを知らせる指標であるとし、1969年、学生運動が勃発するまで一夫一妻制は道徳的標準であり、一人の男と一人の女性が出会い、子を産み、家の中で育てたが、今はその道徳的な価値観が変わりつつあると述べる。多くの社会は性的乱れと同性愛を容認してしまい、差別禁止法と平等法という欺瞞的な悪法を成立させて、その法律に反する者を逆差別している。このことにより、現在、西欧社会は驚くべき速さで家庭と社会の崩壊の道を歩んでいる。このような性革命は世界中で起こっていることで、国連 (UN)、欧州連合 (EU)、その他の国際機関の公式的なアジェンダとなり、すべての国に浸透しつつあると、危機感を露わにしている。

同性婚を支持する人たちは、自分の思い通りに性別を変え、人工的な方法で子供を持つ権利も支持する場合が多く、性革命論者は伝統的な親の概念を壊し、少数の性的少数者を利用して家族はパパ、ママ、子供で構成されるという伝統との戦いを繰り広げている。差別という言葉は区別や違いを意味するが、自由意志が与えられている人間であるならば、当然のごとく、善悪を区別しなければならない。もしこのような区別が法律で禁止されれば、事実上、宗教の自由や良心の自由、表現の自由は抑圧を受けるのである。善悪を区別するのは人を差別することではない。性革命論者は、性道徳を固守する人を嫌い、差別禁止法で弾圧することを狙っている、と述べている。

著者は、性革命論者たちが性革命を実現させるために取り組んでいる作業内容を、幾つかを挙げている。

第一は、包括的性教育である。性革命主義者たちは、子供たちを性に対する自分たちの思考を持つ人に造ろうと、性に対する道徳的制限を撤廃し、ゆりかごから幼稚園・学校に至るまで、ジェンダーイデオロギーを子供たちに注入しようとして包括的性教育を行っている。ドイツの性教育教科書は、裸の医者が自慰行為をする姿を子供たちに見せてくれる。赤ちゃんの時から子供に自慰行為を教え、同性愛・トランスジェンダーなどの概念を正常だと教える。思春期前に避妊専門家になるように教え、中絶を容易にするよう誘導する。一方、数多くの両親が欧州人権裁判所に訴えたが、彼らの訴えを全く聞き入れられなかった。訴えの受理もされなかったのである。

教育現場における「包括的性教育」の取り組みとして、子供や青少年と関連しているほぼすべての国家機構や国際機構は、出生時から子供を性的存在として刻印させ、性行為に対する道徳的限界を除去するためにすべての力と資源を投入する。「包括的性教育」のメッセージは、「性とは楽しむものである」ということである。妊娠のような望ましくない問題は、避妊法で予防、中絶によって解決すればよく、壊れた人間関係の心理的な傷や性病の危険は、些細なことに過ぎない事として受け入れさせている。

全世界的に子供や青少年の性愛化を促進させる団体とは、青少年のための代弁者たち、グートマーハー研究所、国際家族計画連盟、全国教育協会、人口委員会、性教育フォーラム、米国性情報と教育委員会、ユネスコ、国連人口基金、世界性の健康協会、青少年仲間教育ネットワークなどである。このような機関は、世界的な性革命の代理人たちとして、男性と女性の結婚に基づく家族という社会的基盤を破壊するために、性的な道徳基準の緩和という方法を用いる。

この中で、包括的性教育のための国際家族計画連盟 (IPPF) は、すべての若者たちの性と生殖に関する健康の権利を増進し、保護し、擁護するための努力をする。ここでは、性に関する情報と性教育に対する権利、楽しみに対する権利と関係に対する自信、そして性に対するすべての側面が含まれる。このため、すべての年齢の子供と若年層に情報が提供される必要があり、学校内外の青少年たちを洗脳させるには幅広い戦略が必要である。このIPPFの体制は、包括的性教育の重要な要素である以下の7つを含んでいる。

1. ジェンダー：ジェンダーと性の違い、ジェンダーに対する偏見、固定観念と不平等の兆候と結果
2. 性と生殖に関する健康とHIV：コンドーム使用法、他の形態の避妊法（緊急避妊法を含む）、合法的で安全な中絶
3. 性的権利や性的市民権：性と生殖保健に対する権利に基づいたアプローチ、使用可能なサービスと資料にアクセスする方法、様々な性同一性の支持・選択・保護・安全で健康で楽しい方法で性行為を自由に表現して探求する権利
4. 楽しさ：若者たちの性に対する肯定、ジェンダーと喜び、自慰行為、情欲と関係性の多様性、最初の性的経験、喜びに伴う不名誉な烙印に対する対処
5. 男性と女性に対する様々な種類の暴力探求：加害者であり、暴力の予防の同盟として男性/少年
6. 多様性への肯定的な視野：差別を認め、若者たちが単純な寛容性を越え、より進むことができるよう支持
7. 異なる関係（例えば、家族、友人、性交、ロマンチックな関係など）

そして、世界保健機関 (WHO) とドイツ連邦健康教育センター (B29A) が2010年に発刊した「ヨーロッパの性教育標準案」では、すべての性教育団体と同様に、世界保健機関も、人類学的な前提に基づいて動くが、その前提は、人間は生まれた時から性的活動の必要性を持っており、それに対する権利があるということである。大人は、最初からこのような欲求を刺激して、性行為のすべての年齢の子供たちに詳しく話してあげなくてはならず、「性固定観念」なしに性的ニーズに応じて生きることができる機会を提供しなければならない、と主張する。以下は、そのヨーロッパの性教育標準案が提示している、年齢別性教育の内容である。

- 0-4歳：子供たちは裸の状態と身体と性同一性を探求する権利がある。子供たちは良い秘密と悪い秘密を区別することを学ばなければならない。「私の体は私のもの」という事実を学ばなければならない。
- 4-6歳：子供たちは、各身体部位の名前を学び、子供の世話をする人は、身体のすべての部分を洗ってあげながら、性的な言葉で性について話す必要がある。子供たちには、自慰行為を通して自分の体に触れる楽しさの情報が与えられなければならない、同性に向

かう友情と愛、秘密的な愛と初恋、権利に対する認識などを学ばなければならない。

- 6-9歳：子供は、月経と射精、妊娠の選択、様々な避妊方法、インターネットを含むメディアでのセックス、自分の体をタッチするときの楽しさと喜び(自慰行為/自己自劇)、友情と愛情と欲望の違いは、同性に向かう友情と愛、性に関連した疾病に関する情報を知るべきである。彼らは自ら自分の体を点検し、性的言語を使用し多様性を受け入れなければならない。
- 9-12歳：最初の性体験、性行為の多様性、避妊薬とその使用法、快楽、自慰行為、オーガズム、性同一性と生物学的な性別の違い、性病とHIV及び性的権利について学ぶ。子供は、インターネットや携帯電話を使用して、メディア能力を育てなければならないし、ポルノを扱うことができなければならない。子供たちは性について話し、性的な経験をするか否かの意識的な決定を下さなければならない。
- 12-15歳：コンドームを使用する技術を学ぶ。安全で楽しい性行為を持つためのコミュニケーションスキルを身につけ、羞恥心、恐怖、嫉妬と失望に対処する方法を学ぶ。子どもたちは、より現代的なメディア能力を育て、ポルノを扱う方法を習得する。
- 15歳以上：女性の割礼、包茎手術、食欲不振、過食症、処女膜と処女膜再生、同性の関係での妊娠、避妊サービス、性別出産、性売買(売春の婉曲な表現)について学び、妊娠および親になることと関連した、多様な文化的・宗教的規範に対する批判的見解を身につける。

以上を要約すると、親は、子供に自慰行為を教え、性行為についての話をし、子供たちに性的行為をするようにし、学校では、思春期の前に避妊法、中絶、同性愛、親になる方法について教え、子供たちにコンドームの使い方を教え、ポルノに陥るようにし、セックスに依存するようにつつ、このすべてが彼らの「権利」であることを知らせる。そのように子供たちの幼い時に、そして人間の尊厳と幸福な家庭に対する希望も、性的強迫の深淵の中に一緒に溺死させることである。

著者が本書の中で批判をしている主な3つを紹介するならば、

第一の批判は、「包括的性教育」に対する批判である。その理由としては、本当に親になるか否かを自ら決定することが、全世界の若者たちが希望する最大の願いでないということであり、それは殆どの若者たちは、安定した家族を望んでいるからである。

第二、すべての年齢層の若者たちが本当に性と生殖に関する権利、特に自慰行為を通して情欲の器官として、自分の身体を知って行くように、大人たちから指導を受ける権利、男性と女性という固定観念なしに、彼らが望むいかなる方法を用いても、これらの性欲を満たす権利を主張するが、それは、親の権利と宗教の自由を損なうことになる。宗教は、若い世代に伝えなければならない性道徳の価値を教えるからである。

第三、包括的性教育と「安全な性的関係」というメッセージが、HIVやその他の性的関係を通して感染する病気から人々を保護しない。むしろ、性教育による子供の性愛化は、梅毒と淋病の発生率を再び高め、多くの若い女性を永久的に不妊にする性感染症の爆発的な拡散を生むからである。

第四、包括的性教育を受けた子供たちは、性的羞恥心が破壊されていない他の子供よりも、性的暴行から自分自身を守り難くなる。子供たちは親交と性的な接近の違いを区別することはできなくなるからである。特に情緒的に困難を抱えている子どもたちは、な

おさらのことである。

最後に、全世界の若者たちが、自分の生まれていない子供を殺害できる「権利」を持つ必要はない。彼らは生命とすべての個人の尊厳性を尊重するように育てられなければならないからである。

著者は幼い子供の性愛化の問題について、「政府が強要する普遍的性教育方式は「快楽主義」を前提に作られたものだと指摘したが、いくらお互いの合意の下に性行為は行うことをルールにしても、子供の性欲が極大化された状態で性的な調節が可能ではない、と述べる。

第二の批判は、性規範の崩壊をもたらすジェンダーイデオロギーに対する批判である。哲学者ジュディス・バトラーは、性別は男女という身体的な性よりも、自分が考える性に決定されると言った。トランスジェンダーの活動家リキー・ウィルソンは、「男女両性」の概念を終わらせることが私たちの目的であると言った。このように性的指向、性同一性などは、私たちの社会の基盤となった価値を転覆させようとする意図であり、事実が否定され、空想が支配する時代になった。これは人間に対する根本的な概念が変わったからである。

著者は、「ジェンダー主流化」(gender mainstreaming)という理念から、ジェンダーイデオロギーの背景を語る。この「ジェンダー主流化」というものは、生物学的な男性と女性の両方を区別するこの二分法的な構造を排除し、「性別の柔軟性」を主張し、自分で性別を選ぶことができるとする。それで、その概念として、二つの性が異なるということは、社会と言語が作った概念であるので、人間がそれを作ったり取り除いたりすることもできるので、子供たちにもこのような性の固定観念をなくすように助けなければならない、と主張しているである。

しかし著者は、生物学的男女の存在を無視すれば、その対価は膨大で深刻なものになる。人間のアイデンティティを破壊し、性的乱れをもたらし、家庭と結婚を破壊させる。そのようなものが崩れると、人類は歴史から幕を閉じるようになる。だからジェンダーイデオロギーの思想を信じることはできない。それは、私たちが持っている経験は無視することであり、私たちの理性を無視することである。これは、ヨーロッパの人間の成長の背景となった科学まで無視すると、主張することである。しかし、驚くべきことは、この理念が多くの大学で扱われているという事実である。ドイツでは、殆ど女性で構成されている何百人もの女性学者たちが「ジェンダーイデオロギー」を導入しているが、この理論は、過去の社会主義と今の全体主義と変わらない。この理論を学ばせ、同性愛を容認しなければ差別主義者として扱われる。

なぜこのジェンダーイデオロギーが発生したのか。マルクス主義の根本的な理念は、家族破壊であった。歴史をたどるとマルクス主義は、フランス革命から始まった。マルクス主義は、多くの運動の土台となったが、特に1968年に起きた学生運動によって、急進的なフェミニズムと性の解放を謳う性革命が始まったのである。そして、このグローバル性革命の実現に導く「ジェンダーイデオロギー」という思想が、いかにも公認された理論であるかのように、「ジェンダー理論」として既に日本の大学にも浸透し、学生たちに教えられており、2022年度から高校の「公共」の教科書に、同性愛や性の多様性や性のスペクトラムという概念を擁護する形で紹介しながら、その正体を現すことになるが、教育

者たちはこの危険性に目覚めることができるだろうか。

著者は、このような歪んだジェンダーイデオロギーを主張する学者たちは、むしろ国家と学界、財界のエリートたちによって受け入れられ、位相が高くなったと指摘し、その理由は、エリートがこれらの学者といわゆる性的少数者 (LGBT) を利用して自分たちの力を集める良い道具として使えるとしながら、今は世界的な役割を果たすすべての強大国のアジェンダとなったと明かす。特にアフリカ大陸の国々が、この強圧的な働きを感じている。これが、国連 (UN) と欧州連合 (EU) の戦略であり、ロックフェラーやビル・ゲイツなどの慈善財団までもこの戦略に巻き込まれており、国の中央政府だけでなく、多くの主流社会メディアが同じ声を出している、と警告する。

この性革命が、過去の革命と様相が異なるのは、過去の「革命」とは、下から上に上がってきたが、この性革命は上から下に下っていく構図である。これは、主に富と力をもっている人たちによって支持されている。そして、すべての人に影響を与える社会工学的な方法が動員されている。法律の強行と性的少数者たちを道具として使い、自分たちの目的を果たそうとしている。

著者は、このジェンダーイデオロギーが新たな全体主義を追求する方向に方向転換をしようとしているのを見て、すでに多くの事例で西欧社会が持っていた民主主義が侵害され抑圧されていると指摘し、宗教の自由、言論の自由、自分たちの子供を教育する自由まで奪う、と述べる。彼らの性革命への喫緊の課題は同性婚合法化であり、現在、幼い子供たちにまで歪んだ性の知識を強制的に政府が洗脳しており、トランスジェンダーになる人たちが増えている、と指摘する。

第三の批判は、ジョクジャカルタ原則の世界的適用化の政策である。

「ジョクジャカルタ原則」(The Yogyakarta Principle) は、全世界的なジェンダーイデオロギーの実現のための詳細なマニュアルである。ジョグジャカルタの原則は、同性愛アジェンダを詳しく説明している。その原則は、すべての国が憲法、社会、政府機関、保健観念や教育を変え、国民の基本的な態度を変え、同性愛者に特別な恩恵を与え、彼らの性同一性と性的ライフスタイルを受容するように、法的に強制し実行する。このジョクジャカルタ原則を、国連や欧州連合の傘下機関の助けを受けて、世界的に浸透させようとする活動家やNGOが存在している。ジョグジャカルタ原則の本文では、同性愛アジェンダを全世界に実行させるという目標とその方法を明らかにしている。

この原則は、多数の権利と市民的な自由を対価として、非異性愛的少数者のための特権的地位を要求するものである。この文書の核心概念は「性的指向」と「性同一性」であり、その序文では、この用語の概念が、次のように定義されている。「他のジェンダー、あるいは同じジェンダー、あるいは複数のジェンダーを持っている人のために重大な感情的・愛情的・性的魅力を感じることができ、親密な性行為をすることができる能力、と理解しているものである」。

これらの定義は、どのような類型の性的嗜好や行為も、さらに小児性愛 (児童との性的関係)、近親相姦 (血縁関係の人との性的関係)、一夫多妻、不特定多数との性的関係、或いは獣姦 (動物たちとの性関係) までも排除されない。このことから、性別 (ジェンダー)、性的指向、性同一性、性的表現、ホモフォビア、多様性などのような新しい用語を作り、人権と差別禁止という崇高な概念を誤用している。この原則の核心内容は、以下の通り

である。

第一、非異性愛的性行為の容認である。

この原則は、次のように言及している。「他の種類の人権を享受することに影響を与えるようなものとは関係なく、すべての人は、性的志向や性同一性を根拠として差別されず、人権を享受する権利がある……性的指向、或は性同一性に基づく差別の例とは、性的指向や性同一性に基づいて法の下での平等や同等の保護を毀損し、人権と根本的な自由という平等な基礎の上に認識され、享受され、実現することを無力化させる目的や効果を持つすべての区別、排除、制限または優先を含む。」

著者はこの原則によって、正しい事、間違っている事、善と悪に対する人々の本質的な道徳的な区分が、性の領域に適用されることが禁止されており、宗教の自由、良心の自由のような人権は、この原則に従属しているものとみなされ、安定的な異性的関係が社会存続に不可欠なものであるにもかかわらず、性の目的が一人の男性と一人の女性の愛の結合と子供の出産であることを説教することも、教えることも、このようなことを信じながら生きることもできなくなった、と批判する。

第二、男女両性の解体である。

この原則から、人間の性同一性が生物学的な性的特性でない、任意的な性的指向と性同一性によって決定されるとしたので、性的指向の数だけ多様に存在するという。もはや性別は、単に男性と女性のみで存在しない。クィア男性、レズビアン女性、バイセクシャル、トランスジェンダー(性転換症)、間性など、多様なジェンダーが存在することを認める。

そして、これを根拠としてこの原則は次の事を要求している。結婚と親になるといういかなる地位も、人間の性同一性を法的に認めることを防ぐ方式で適用されてはならないこと。国家は必ず立法的行政措置を含め、必要なすべての措置をとるべきであること。各個人が自ら定めた性同一性を十分に尊重し、法的に認められなければならないこと。個人のジェンダー/性を表示しなければならない、国が発行するすべての身分証明書(出生証明書、旅券、選挙関連記録及びその他の文書)に、自ら定めた性同一性を反映することができる手順を確実にしなければならないこと。自分の性的指向とジェンダーアイデンティティに関する情報をいつでも、誰に、どのように公開するかを日常的に選択することができる権利を保障しなければならないことである。

著者はこの原則に対して、生物学的ジェンダーを定義することができないトランスジェンダーや、曖昧な生物学的性である(間性)に生まれ、苦しむ性的少数者を言い訳に、人類と法的体系に深く定着している価値をひっくり返し、さらには、明確な研究結果でさえ無視している、と批判する。

第三、LGBTIの特権の擁護である。

この原則は、LGBTIの活動のための特別な権利を要求する。この特別な権利が受け入れられたら、LGBTのライフスタイルを促進させるための結社、集会およびデモは、公共の秩序及び公衆道徳によっても何ら限度を受けない、唯一のものとなる。これは、この原則に対して同じ見解をもたない、またこの原則を促進することに反対する人々を侮辱して憤慨を起こさせる、無制限の自由を与えることとなる。この種の特権は、民主主義社会では決して容認できない。これを容認することは、民主主義を放棄することを意味する。ジョージジャカルタ原則の主な目的は、人権保護ではなく、特権を追求するためのものと考えら

れる。

著者は、なぜ非異性愛的行動に定義されている特定の少数だけが、国家から新たに制定された法律と救済措置と監督機構を通して、特別な保護を受けなければならないかについて説明すべきである、と主張するのは、LGBTに実質的に特権的地位を付与するものであるからだ、と述べる。そして国連や欧州連合は、どの集団をどれほど熱心に差別から保護するかにおいて選択的に行動し、真剣に迫害される宗教的少数者は、国際機関が性的指向に基づく差別に注ぐ関心の一部さえも受けられずにいる現実があることを指摘した。

第四、同性婚と養子縁組の権利の要求である。

この原則は、次のように言う。「すべての人は、性的指向や性同一性に関係なく、家族を構成する権利を有する。お互い異なる形態の家族はたくさんある。どんな家族も構成員の性的指向や性同一性により差別されてはならない」。

この原則には、家族が何を意味するかに対する定義は、全くないが、有史以来すべての文化圏に適用される家族の基準である、生物学的な子供を出産する一人の男性と一人の女性との結婚という基準はなくなってしまった。その代わり、変化するジェンダーをもつすべての部類の人の間の結合をすべて家族と称し、国家がこれを認め、保護し、各種の社会福祉の恩恵を提供する必要がある、国家は必ず、異性婚及び異性の登録パートナーに付与されているすべての権利、特権、義務、利益を、同性婚や同性の登録パートナーにも平等に付与すべきである、と主張する。

同性同士の関係での不妊は、養子縁組や(精子寄贈を含む) 出産補助措置を介して人工的に治癒され、国家は必ず可能なすべての立法・行政的な措置を始めその他のすべての措置を講じて、児童の最善の利益を優先的に考慮するようにしなければならず、児童や家族構成員または他の人たちの性的指向と性同一性が子供の最善の利益と合致することができない、と考えてはならないという。

著者は憲法で保障された親の養育権が、LGBTアジェンダを実行するための障害になっていること指摘、国家は必ず個人的な見解を形成することができる児童が、自分の意見を自由に表明することができるようにし、そのような見解は、児童の年齢や成熟度に応じて、当然考慮されなければならない、と主張した。

つまり、それは生物学的な親に対する子供の権利は、子供を出産した大人たちの児童に対する権利に変わることになる。一旦、恣意性が法律の地位にまで上がると、児童の福祉を保護する可能性はもはやなくなる。例えば、父親が自分を同性愛者、または、心が女性であるトランスジェンダーであると決定した後、変化に富むジェンダーの他者とパートナーになったとき、直前の異性婚から生まれた子どもの親権は、このような新たな性的関係が児童の福祉に有害という理由で拒絶することはできなくなる。この原則によって、どんなジェンダーをもつ二人であろうと、あるいはそれ以上の人々の間であろうと、恣意的な関係が「結婚」と「家族」となり、政府補助金支援の特典も受けることになる、と批判する。これは個人の意志を、公益よりも優先するものである。公益の概念は消え、善悪を定義する客観的権威はもはや存在しなくなり、個人の意志と願望が最終的に善悪の基準となった。こういう人権の概念を持つ家庭と社会は衰退し、崩壊へと向かう。人間が普遍的な道徳を追求する目的は、社会の平和と安泰をもたらすことにある。

このジェンダーイデオロギーを基盤とする包括的性教育、ジョクジャカルタ原則の世

界的適用化は、グローバル性革命実現の主な手段である。そして、このグローバル性革命は、新しい全体主義のアプローチである。この全体主義は、今、新たな衣を着て、イデオロギー的な背景をもった歪曲された自由、寛容、正義、平等、差別禁止、多様性という名の殻を被って、現代社会に再登場している。これは世界的な現象であり、国際機関で行われている影響力のあるロビー活動によって主導されている。このようなグローバル性革命の目的は、性規範の解体である。性道徳的な限界をなくしてしまうのは、人間の自由を増大させているように見える。しかし、それは道徳倫理感のない人間を量産し、社会構造を解体し、家庭や社会の在り方を乱し、精神的な混乱、社会的な混乱を引き起こすのである。

長い間、緻密に計画され、組織的に進められてきたこのグローバル性革命によってこの世界が悪化して行くことは、自然の流れではなく、邪悪な者の執拗な努力による結果であることを示している。したがって、これに対抗するためには、危機感と切迫感をもって対抗運動に献身しなければならないだろう。健全な性倫理を持って、偏屈なジェンダリズムの暴風を防ぐことが今、人類に求められている事であろう。

(本稿は、Gabriele Kuby, *The Global Sexual Revolution – Distruction of Freedom in the Mame of Freedom*, Angelico Press, 2012の、楊尚眞・弘前学院大学教授による書評である。)